

在日バングラデシュ人コミュニティの変化と帰還移民に関する研究Ⅱ

○立教大学 野呂芳明
立教大学 水上徹男

1 目的

我々の報告の目的は在日バングラデシュ人コミュニティの特徴と日本からの帰還者の現状などを明らかにすることである。第Ⅱ報告では、日本国内のバングラデシュ・コミュニティ形成にもつながった初期のバングラデシュ人来住者（多くが非正規滞在であった）に焦点をあて、来日した事情、日本での暮らし、母国帰還とその後の生活の現状等について、現地に出向いての面接調査、調査票調査の結果を報告する。

2 方法

バングラデシュでの聞き取り調査は2014年9月および2015年9月（+2016年9月予定）にダッカ市およびビクラムプール（Bikrampur）にて実施した。その後2015年冬に現地エージェントに依頼して質問票調査を行った。結果、インタビューは合計20人、質問票調査には49人の有効回答（インタビュー対象者との一部重複あり）を得ている。なお、問題意識・研究方法とも近接する先行研究の例として樋口直人・稲葉奈々子（2003）があるが、後述するように、そこで確認されたのと同様の傾向が我々の調査からも見出された。

3 結果

1980年代後半から2000年代初め頃に渡日したバングラデシュ人は、相対的には高学歴（日本の高校卒相当以上）者が多い。彼らを海外移住・労働へと押し出した背景要因としては当時のバングラデシュ国内の政治的・社会的混乱が大きく、「国内に仕事がなかった」という回答が複数あった。早い時期の来住者のほとんどが観光等の短期の滞在資格であったが、1989年の相互ビザ免除協定廃止後はブローカーに高額の仲介費用を支払っての入国が増えたこと、日本では首都圏の都市部および郊外の中小・零細の製造現場や飲食店等で多くが働いていたこと、等が語られており、それらは樋口・稲葉（2003）にも共通する知見である。一方、これら移動の当事者の出自などライフストーリーに着目すると、ビクラムプール（Bikrampur）の出身者が多いことがわかった。こうした同郷人のネットワークは、日本への渡航において大きな役割を果たしたが、日本からの帰還（大半が強制送還による）後の生活にも継続して一定の意義をもっているようである。ただし、日本との関係そのものは強制送還により大部分絶たれて、以前の雇用主や友人と個人的な交流が続いている例はあるものの、職業をはじめ現実の生活場面で滞日経験が活かしている事例はきわめて少なかった。

4 結論と今後の課題

バングラデシュ人は概して親日的だが、強制退去の憂き目を見た帰還者もまた日本での生活に対する大変強い郷愁を語る人がほとんどであった。若く人生の最も多感な時期を過ごしたためもあると思われるほか、帰還から現在に至る暮らしと日本での暮らしという、大きく異なる2つの生活と人生の時間・空間を生きなければならなかったことに由来する強い感情のようにも思われる。本調査を通じて、バングラデシュ帰還労働者の日本での就労や生活から母国帰還後の生活実態等の全体像および深層に接近することが今後の課題となる。

文献

- バングラデシュ開発問題研究所, 1993, 『日本への出稼ぎバングラデシュ労働者の実態調査』総合研究開発機構(NIRA)
- 樋口直人・稲葉奈々子, 2003, 「滞日バングラデシュ人労働者・出稼ぎの帰結--帰還移民50人への聞き取りを通じて」『茨城大学地域総合研究所年報』(36): 43-66.
- , 2004, 「マージナル化か、ニッチ形成か: 滞日バングラデシュ人の労働市場, 1985-2001」『茨城大学地域総合研究所年報』(37): 61-70
- 堀口松城, 2009, 『バングラデシュの歴史』明石書店.